

## 要旨

【目的】ダウン症候群に対する、非確定的な出生前検査結果が偽陰性もしくは偽陽性であった親の心理状態や、養育行動への影響を明らかにすることを目的とする。

【方法】文献検索には電子データベースを用いて、各データベースの収録開始年から2015年11月までに収録された研究論文を網羅的に検索した。対象となった文献の内容から非確定的検査の結果を偽陽性と偽陰性に分類して分析した。

【結果】13件の文献を研究対象とした。偽陽性結果であった女性の心理過程は、非確定的検査で陽性結果を受け取った後にショックを受け、大きなストレスを感じ、心理的苦痛が高くなることが明らかになった。そして将来に対する不安や、胎児の健康状態に関する不安などが強かった。その後の確定的検査（侵襲的検査）を受けるか否かの決断をするために、親が直面している問題についてより深く考えられるような情報がほしいと考え、一緒に意思決定をしてくれる人を探していた。そして確定的検査を受けることの流産リスクと、障がいを持つ子どもの可能性との間で葛藤し、中絶する可能性について、自分自身の価値観の中でジレンマを抱えていた。また妊娠について話すことや、考えることを避け、あたかも妊娠していないかのように、妊娠生活を拒絶して過ごしていた。また不健康な胎児のイメージを作り上げ、何か悪いことが起きている可能性に対して心の準備をすることが明らかになった。非確定的検査の結果が偽陽性であったことが確定的検査で判明すると、多くの女性は不安が軽減し、拒絶していた妊娠生活を再び取り戻す。一方で一部の女性はその後も継続して、子どもの健康を心配していた。多くの女性は偽陽性結果であったことは、将来の妊娠に影響しないと答えた。一方非確定的検査で偽陰性結果であった親は生後にダウン症候群と診断されたことと、非確定的検査の結果が陰性であったことの不一致の意味を考えていた。そして出生前にダウン症候群を持つ子どもの出生を防ぐことができなかったことに対して、医療専門職を非難する傾向があった。さらに子どもに対する否定的な態度をとり、子どもの世話に困難感を抱くなど、育児ストレスが高いことが明らかになった。

【考察】非確定的検査の結果が偽陽性であった親は、確定的検査結果後も不安を継続させていることがあり、複雑な心理状態を理解したうえで、不安やストレスを少しでも軽減できるように支援する必要があると考えられた。また非確定的検査が偽陰性結果で、出生後に子どもがダウン症候群であることが判明した親は、他のダウン症候群の親と比べて子どもの存在を否定的に捉える時間が長い可能性があり、告知時から継続して親の心理過程に寄り添い、子どもを肯定的に捉えられるように支援する必要があると考えられた。

【結論】非確定的検査を受ける前の情報提供と、結果を受けた妊婦と家族を継続的に支援していく必要があることが示唆された。